ウズベキスタンへの旅

ウズベキスタン共和国は、旧ソビエト連邦に属していた、中央アジアに位置する国。日本からは季節によるが、成田―タシケント間の直行便が運航されている。飛行時間は約9時間半。直行便以外では、韓国の仁川空港で乗り継ぐことで、通年旅行することが可能だ。日本との時差は4時間。2018年2月から日本国籍保有者はウズベキスタン国内到着後30日間に限りビザ免除での滞在が可能となった。新たな旅行先として注目の高まるウズベキスタン。2年に一度開催される「東洋音楽祭」の取材を通して、古都サマルカンドの魅力に迫った。【リポート＝小林大樹】

成田―タシケントに直行便

サマルカンドには特急で

サマルカンドは、ウズベキスタンの首都タシケントから列車で約2時間半の地方都市。ウズベキスタン最大の観光都市だ。ステップ気候から地中海性気候への移行部に当たり、抜けるような青空とモスクの色から「青の都」と呼ばれている。

昨年のビザ緩和以降、日本からの旅行者も増加しているとのこと。現地取材中にも、大手旅行会社のパッケージ商品を利用した親子連れや、大学生のグループなど、数組の日本人旅行者を見かけることができた。

かつてはシルクロードの要衝として栄えたサマルカンド。その存在が世界に広く知られたのは、紀元前4世紀、アレクサンダー大王の遠征までさかのぼるという。13世紀にモンゴル帝国に滅ぼされるも、14世紀末に英雄ティムールが現れ、再び帝都として復活を遂げた。

現存する荘厳なモスクや建築群は、ティムール王朝以降に造られたもので、「サマルカンド―文化交差路」として2001年にユネスコ世界遺産に登録されている。

■ウズベキスタン　面積＝44万7400平方㌔（日本の約1・2倍）▽人口＝3280万人（2019年）▽公用語＝ウズベク語（ロシア語の使用度も高い）▽宗教＝ウズベク人の多くはイスラームのスンニ派。信仰生活は多様という▽気候＝砂漠地帯のため、雨は少ない

▲写真最上段　シャーヒ・ズィンダ廟群　シャーヒ・ズィンダとは「生ける王」という意味。サマルカンドの霊廟群で、ティムールの妻や親族、部下たちを祭っている。20以上の建造物が立ち並び、青い装飾はＳＮＳ映えするとして多くの観光客が写真を撮っている。

▲写真２段目右　グーリ・アミール廟　ティムールとその息子、孫の霊廟で、ペルシア語で「王の墓」を意味している。ティムールの孫、ウルグ・ベクによって完成された。青いドーム状の建物の内部は、黄金の装飾が施され、見る者を魅了する。

▲写真２段目左　ビビハニム・モスク　ティムールの妻の名を冠したモスク。モスクのドーム部分は40㍍に達する高さで、かつてイスラーム世界で最大規模のモスクであった。

▶写真右　レギスタン広場　「砂の場所」という意味があり、「ウルグ・ベク・マドラサ」「シェル・ドル・マドラサ」「ティリャー・コリーモスク・マドラサ」という三つのマドラサ（イスラーム世界における「学院」のこと）で構成されている。

「青の都」サマルカンド

東洋音楽祭に30カ国参加

サマルカンドで2年に一度開催　観光・文化交流を重視

8月26～30日の5日間、ウズベキスタン共和国のサマルカンドで第12回国際音楽フェスティバル「東洋音楽祭（シャルク・タロナラリ）」が開催された。

2年に一度、サマルカンドのレギスタン広場で開催される音楽祭。ユネスコの支援の下、良質な民族音楽・芸術の幅広い普及、保護、発展などを目的に1997年から開催されている。

今回の音楽祭には世界30以上の国から音楽グループが参加。初日となる26日には、音楽祭関係者を招いてオープニングレセプションが開かれた。

冒頭、主催者を代表してウズベキスタンのシャヴカト・ミルジョーエフ大統領があいさつ。ミルジョーエフ大統領は2016年の就任以来、政府機構の改革や経済の自由化、諸外国との友好関係の推進などに注力しており、その中でも音楽・観光分野には特に力を入れているとのことだ。

大統領に続いて、音楽祭の開催を支援しているユネスコのオードレ・アズレ事務局長も祝辞を述べた。

レセプション翌日の27日からは各国の音楽グループの演奏が披露され、旅行者や現地の人々は大いに盛り上がった。

今回、日本からの出演はなかったが、サマルカンド市と交流している奈良市から仲川元庸市長が訪問し、同じシルクロードの世界遺産観光都市として教育・文化・観光分野での相互交流を図る覚書をサマルカンド市と締結した。

ミルジョーエフ大統領

ウズベキスタンのグループの演奏

アフガニスタンから参加

タジキスタンのグループ

民族楽器ドゥタールの奏者 駒﨑 万集さんに聞く

音楽祭の取材中、ウズベキスタンの民族楽器「ドゥタール」の日本人奏者、駒﨑万集さんと出会い、音楽を通して感じるウズベキスタンの魅力、見どころを聞いた。

――ウズベキスタンの楽器を始めた経緯は。

「2015年10月から2017年10月までＪＩＣＡのボランティアとしてウズベキスタンのブハラにある、日本でいう小中一貫校で音楽を教えていました。当初はピアノを使って子どもたちに日本の歌を教えながらウズベキスタンの珍しい音楽に触れたいと考えていただけで、民族楽器そのものには興味がありませんでした。しかし、2年の任期のうち約1年がたった頃、首都のコンセルバトーリア（国立音楽院）でドゥタールを学んでいる学生さんの素晴らしいアンサンブルを聞く機会があり、その演奏を聞いたことでドゥタールが素晴らしい楽器で、奥深くて面白くて、自分の全く知らないタイプの音楽を奏でることができると知り、その場でドゥタールを始めることを決めました」

――ウズベキスタンの音楽、楽器（ドゥタールなど）の特徴は。

「ウズベキスタンの伝統音楽は、歌も楽器もノーラと呼ばれる独特のこぶしのようなうねりがたくさんメロディーに用いられています。西洋音楽の理論とは全く違う構造でできていて、基本ハーモニーは変わらなくて全部の楽器で同じメロディーを演奏します。ハーモニーを変えずに作られている音楽とは思えないほど、独特でさまざまな美しい旋律の曲や歌がたくさんあります。歌詞のほとんどは『愛』についてです。ロマンティストなウズベク人ならではの歌が多いですね」

「私が演奏しているドゥタールは、弦が2本しかない楽器で、二つの音が常に鳴って演奏されます。『ドゥ』はペルシャ語の2、『タール』はペルシャ語の弦という意味です。中央アジアには2弦の楽器がたくさんありますが、形、弦や本体の材質、大きさがそれぞれ全く異なり、演奏スタイルも音楽も全く違います。ウズベキスタンのドゥタールは特に竿が長く、弦は絹でできているので音がとてもまろやかで柔らかいのが特徴です。演奏方法がとても特殊で、とても二弦だけで鳴っているとは思えない響きを奏でることができます」

――万集さんが思うウズベキスタンの魅力とは。

「ウズベキスタンは、昔栄えた王国が築いたさまざまな遺跡があり、イスラム建築の美しさには目をみはるものがあります。歴史が深く、文化、宗教、民族も非常に多様で、街にはロシア正教会もあれば、モスクもあり、ユダヤ教のシナゴーグもあれば、ゾロアスター教の名残の遺跡や仏教遺跡まであり、海に囲まれた日本と真逆の国といってもいいと思います」

「魅力は遺跡だけでなく、『人』も大きな魅力の一つです。ウズベクの人々は、外から来たお客さんを大歓迎してくれます。とても気さくで人懐っこく、1人で行動していても声を掛けられるなど、あまり1人になることがありません」

「美しい手縫いの刺しゅう、個性的な陶器、アクセサリーなどの民芸品もたくさんあり、各地方でそれぞれ特色のある柄があるなど、どこに行っても買い物も楽しめます。昔のシルクロードの商人が商売をして栄えた名残が今もある国だと思います」

――まだウズベキスタンに行ったことがない方へ一言。

「日本になじみのない、歴史がある国なので、現地ガイドを頼むと、ただ見ているだけでは分からない深い歴史の話や建物の説明などプロの話を聞けるのでお勧めです。お薦めのシーズンは、4～6月の春の期間と、8月の終わりから9～11月ごろの秋のシーズンです。夏はとても暑いです。また、ウズベキスタンは比較的治安もいいので、とても旅行しやすい国だと思います。ぜひウズベキスタンを旅行先の候補の一つにしてもらえるとうれしいです！」

遺跡も、音楽も、人も魅力的

駒﨑 万集氏（こまざき・まんしゅう）東京都出身。東京音楽大学ピアノ科卒業。ピアノを村上隆氏、ドゥタールをGuzal Muminova氏に師事。ウズベキスタン、タジキスタンの美しい伝統音楽をドゥタールのソロ、弾き語りで演奏するスタイルを確立。ウズベキスタン、タジキスタンの大使館イベント、コンサート、ラジオなどで精力的に演奏している。

※第2回駒﨑万集ドゥタール演奏会「糸竹の道」＝2019年10月22日午後3時開演、表参道ZIMAGINE、料金3千円＋1ドリンク。詳細https://mashumushuk.com/